「弱い責任」で連帯し、「利他」が循環する社会へ

対談

中島岳志（政治学者） × 戸谷洋志（哲学者）

「弱い責任」を引き継ぐことで、互いに支え合える社会になる。
自己責任論とは真逆の方向に向かう、
戸谷洋志さんの近年の論考は、利他思想に通じるものがある。
そこで、利他をめぐる豊かな著作群を持つ中島岳志さんとの対談を実施。
初顔合わせながら、議論はどんどん深まってゆき……。

「利他の受け手」と「責任の対象」

中島　利他を説明するうえで、利他と利己はメビウスの輪のようにつながっているものである、ということがまずポイントだと思います。たとえばボランティア活動をやっている人を見て、私たちは「利他的な人だな」と思いますが、実はその人がボランティアをやる動機が、次の市議会選挙で有利になるんじゃないかとか、就活の際のポイントになるんじゃないかとか、そういうものだった場合、その行為は素直に利他的だと認められるでしょうか。むしろ嫌悪感を抱くのではないでしょうか。

重要なのは、利他的な行為とは、やろうとしてやれるものなのか、という問題です。あの人のために、と思ってやった行為でも、相手にとってはありがた迷惑だったりすることもあるじゃないですか。利他を考えるには、受け手の側がどのようにその行為を受けとるのかが非常に重要になってきます。

もう一つ、時制の問題も大事です。利他というのは、ある行為があってすぐに「あ、いいことされたな」と受け手が感じられるものでは必ずしもないんです。たとえば私が中学生の時、級友とケンカして、先生にめちゃくちゃ怒られました。怒られたけれども、その先生は同時に「中島君、いくら君が正しいと思ったことでも暴力で解決しようとしてはならない。人を説得できるような理知的な言葉をつむげる人間になれ。勉強しろ」と非常に熱をこめておっしゃった。それから勉強するようになって、高校、大学、大学院と過ごし、一五年くらい経ってようやく、「あの時先生に言われたことが自分の人生を築いてくれたんだ」と気づいた。

このように、受け手にとっての利他は過去からくるもので、すでに受けとっているのに自分がまだ気づいていないことがたくさんあります。

戸谷　私は昨年出版した『生きることは頼ること「自己責任」から「弱い責任」へ』（講談社現代新書）の中で、責任の概念を「強い責任」と「弱い責任」の二つに分けました。責任という概念には、主体と対象の二つの側面が備わっていると考えています。主体とはざっくり言うと、「責任は誰にあるのか」と言う時の「誰」に当たる存在ですね。それに対して、対象とは、責任が向かう先です。

西洋の伝統的な哲学ではアリストテレスからカントを経由してハイデガーに至るまで、基本的には責任の主体に注目した議論が多数派を占めます。それに対して、私が主たる研究対象にしている哲学者ハンス・ヨナスは、責任の対象の側から責任概念の説明を試みました。私たちは「何に対して」責任があるか、が重要なのであって、誰がその責任を負うのかはさほど重要ではない、というかなり極端な考え方を彼はしています。

責任の主体に重きを置く責任概念は、何か問題を抱えてしまった時に「お前が自分で選んだことなんだから全部お前が責任取れ」と迫る自己責任論の発想になってしまう危険があります。一方、ヨナスの導入した、責任の対象から見る視点だとどうなるか。

たとえば目の前に傷ついた子どもがいるとして、その子を傷つけたのが私ではなかったとしても、手をさしのべる責任があるんだ、とヨナスは主張します。要するに、目の前にケアを必要とする他者が現れたら、責任を引き受けないといけないんだ、と。

中島　責任の対象に着目するのは、受け手の側から利他を見る私の考えとも重なるなと思いました。

戸谷　そうですね。ここで重要なのは、人間一人の力は限られているから、自分一人で責任を果たせるとは限らないし、果たさなくてもいいのだという考え方です。一人で無理だと思ったら、ケアされるべき他者を助けるために他の人と連帯するべきなのです。こういった形で責任の対象のほうにフォーカスして責任概念をとらえていくと、自己責任論からは導けなかった他者との連帯や、責任を果たすためにはむしろ他者を頼ることが求められるというロジックが導き出されます。

ヨナスを研究し始めた大学院生の頃から、日本社会がどんどん自己責任論に傾斜していく様を横目で見ていたので、こうした責任概念をある種のサプリメントとして展開していきたいなとずっと考えていました。自己責任論を「強い責任」と呼ぶのに対し、自分一人で背負いこまなくてもよい、共有可能、連帯可能な責任のあり方ということで「弱い責任」と呼んでいます。

中島　ケアされるべき他者が現れた時に「応答してしまう」ということですよね。私は『思いがけず利他』（ミシマ社）の中で、『文七元結』という落語について書きました。このお話の主人公、長兵衛さんは自分の人生がかかった五〇両を持って歩いていたところに、身投げしようとしている若者に遭遇し、ぱっと抱きすくめて、わけを聞いてその五〇両をやってしまうんですね。その理由は誰にも答えられないし、噺家の

この続きは本誌でどうぞ！